

言葉は、「心」をもっている

校長 柏原 奈保



金木犀の香りが漂い、秋の訪れを告げてくれます。例年に比べ、やや早い金木犀の開花だそうです。銀杏の実やどんぐりも落ち始めており、季節が進んでいることを感じます。今年の秋は、天気のはっきりしない日が多く、外遊びのできない日も続いています。先日の台風では、横浜でも、大雨が降り、笹下の地域でも避難指示が出されたと聞きました。気候が安定し、清々しい秋の日が続くことを願うばかりです。「天高く馬肥ゆる秋」。秋は、活動するにはよい季節です。体験学習や遠足、校外学習など、校外での活動も増えます。子どもたちには、さわやかな秋風、澄んだ青空のもと、活発にいろいろなことを経験し、豊かに学びを深めてほしいと思います。

『ひとつのことば』 北原白秋

ひとつのことばで けんかして
ひとつのことばで なかなかおり
ひとつのことばで 頭が下がり
ひとつのことばで 心が痛む
ひとつのことばで 楽しく笑い
ひとつのことばで 泣かされる
ひとつのことばは それぞれに
ひとつの心を 持っている
きれいなことばは きれいな心
やさしいことばは やさしい心
ひとつのことばを 大切に
ひとつのことばを 美しく

今日の朝会で「ことば」の話をしました。

「ことば」は、人を喜ばせたり、楽しくさせたりすることができる。でも、逆に、傷つけることがあること。人の心は、悪口を言われたり、嫌な言葉を言われたりすると、チクツと痛み、傷ついてしまう。一度、傷がついた心は、なかなか元には戻らない。元に戻ったように見えても、何かをきっかけにして、傷口が、またチクツと痛み始めることがある。たったひとつの「ことば」でけんかになったり、仲良くなったり、楽しくなったりする。涙が出るほど嬉しくなったり、辛くなったりする。まるで、一つひとつの言葉に心があるように相手の人に伝わって、その人の心を動かしていく。だからこそ、「ことば」を大切に使っていこうと話しました。そして、左の詩を紹介しました。

子ども達は、よく言葉の使い方がもとでけんかをします。「嫌い」「友達やめる」「うざい」……。聞いていて気持ちのよい言葉ではなく、言われた方にとっては、とても辛い言葉です。話を

を聞くと、言った方は、「そんな気持ちはなかった」「ちょっとイラッとして」などと言います。本当に伝えたかった思いは何だったのでしょうか。「やめてほしかった」「一緒に遊びたかっただけ」など、気持ちを十分に表現しきれていない様子も伺えます。言葉は、「使う人の心にあるものが形となって表れたもの」と言えるでしょう。成長途上にある子ども達は、表れた形が、言葉を発した本人の意と異なってしまふこともあります。イライラして、辛くなって、心が乱れて発してしまった言葉。言った本人も辛くなり、心を傷つけ、痛みが残ることもあるでしょう。でも、自分の心で感じていること、気持ちを表現する言葉が見つからず、人を傷つける言葉を発してしまいことも多くあります。言われた人も、言った人も、言葉がもっている心で痛みを感じてしまうのです。逆に、「だいじょうぶ?」「いっしょにがんばろう」などといった温かい言葉や、楽しいおしゃべりは、仲間を支え、互いをやさしく、穏やかな気持ちにさせてくれます。

普段何気なく使っている言葉ですが、その言葉は人の心を動かす「心」があるということを意識し、大切に使ってほしいものです。子ども達に接する私たち大人も、言葉がもつ「心」を考え、子どもたちを励まし背中をそっと押す言葉、成長を促す言葉を使っていきたいものです。

